


 書評

神庭重信 著

うつ病の論理と臨床

鈴木國文

「うつ」をめぐる混迷に新たな視座を

帯に謳われているように「うつ病」に関する「第一人者の最新の到達点」である。もちろん、第一人者の論考が必ずしも面白いわけではない。が、この本は面白い。おそらく、いくつかの明確なねらいのもとに編まれているからであろう、章が進むほどに、読み手を誘う。著者のねらいは、互いに連関した以下の三つの点にあるのではないかと思う、多分…。

一つは、進化心理学という医療実践からはいささか遠いものとも見えがちな領域について、遺伝子に関する確かな知と地道な精神医学実践をふまえ、「うつ病」という具体例を通して、精緻に論ずることである。一般に、遺伝子を巡る考察が進化論的視点にまで広げられると、医学の外へと出てしまうきらいがある。著者はそのことに十分自覚的である。著者自身が「(進化論的視点は)学問論争にこそ向けられるべきで、受診者に向けられる筋合いのものではない」という樽味の警句を挙げているように、本書では、何が臨床に役立ち、何は臨床とは関係のない議論なのか、慎重に留意しながら論が進められている。

こうした姿勢が、この本の第二のねらいと言うべき次の論点へ結びついていく。それは、「遺伝なのか環境なのか」という二分的、対立的視点を越えることである。生物学的研究を専門にしてきた書き手が、心理・社会的事柄について書く時、生物学的視点ですべてを説明しようとするか、あるいは、生物学的視点にいわば足し算のように心理・社会的視点を補う、足し算的思考を重ねるか、そのいずれかであることが多い。しかし、本書ではそうした論述を越えた、第三の視点が示される。著者が「遺伝子・

環境相関」とよぶ視点である。著者は、「環境」と見えるものにも遺伝子によって作られる面があることを慎重に論証していく。こうした論を進める中で、著者は、精神病理学の古典、下田の執着気質の理論を再検討する。生来の気質がいかんして環境に働きかけ、一つの病前状況を形成するかという論である。こうした論の展開は、単なる足し算的な「心理・社会的側面への目配り」の閾を明らかに越えたものと言えよう。

残るもう一つのねらいは、おそらく、著者が「文化アフォーダンス」という言葉でよぶ考え方、つまり「ある社会・文化は、特定の精神と行動を強化する」という考え方にある。この考え方のもと、著者は「うつ病に対する啓発の促進、その結果としてのスティグマの弱毒化」が人々を抑うつへと導いていると言い、「うつ病の時代」とは、畢竟、「うつ状態」が「苦悩のイデオロム」となっている時代のことだと説く。慧眼だと思う。

本書では、わが国の精神病理学を築いた笠原嘉の論考に1章が割かれている。生物学的原理主義に陥ることなく、実践的視点を守る著者が笠原の論考に鋭敏に反応したのはきわめて自然だと思う。2人の間には、良識的「ブレのなさ」とも言うべき共通の思考上の資質がある。精神医学の現状を正確にふまえ、無理なく進められた本書の論考は、今日、日本で精神科医であろうとする者すべてにとって、真に有効な視座をもたらしてくれるものだと思う。

(名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻)

●A5 242 頁 2014 定価(本体 3,000 円+税)
弘文堂刊